

南教滿七十年祭記念

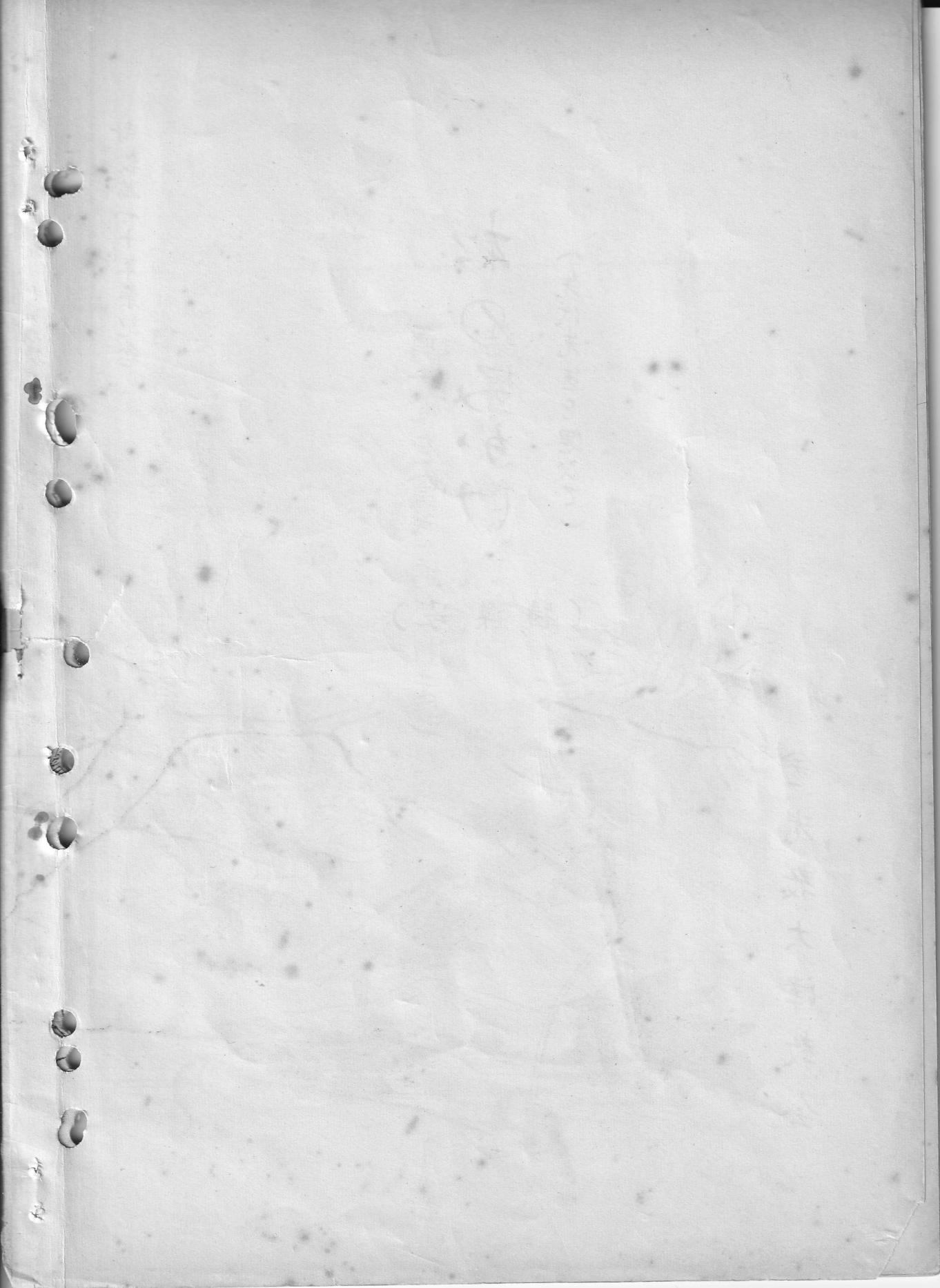
松のみかげ

(先代先生を偲びて)

(特集号)

金光教大津教会





一月十四日、今秋、七十年祭を迎えるに当り
教主金光様に御教を願ひ奉りて

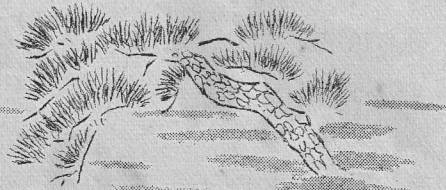
眞一心を貫き通されましたら

結構でございます



は し が き

初代先生が、大津市神楽真町に御布教されてから、丁度七十年という永い年月が経ちました。初代先生の血の滲むような創業の御努力によりまして、深く固く根を下しました大津教会が二代三代四代と、守成の功高く、堅実に年と共に栄えゆく状を心から寿ぐと共に、尊い有難い歴史を回顧し、温故知新、深く道を求め、今こそ教会、出社、信徒が一体一心となり、根幹・枝葉・相寄り・相助け、無窮の発展を顕現させて頂き、御神意に応え奉りたい念願の下に、松のみかげ持集号を発売させて頂きました。編集に当り各教会長先生を始め御信徒皆様の御盡力を頂きました事を厚く感謝致します。尚、不十分な点も幾々ある事と思ひますが不備の点、悪しからず御許しをお願い致します。(編集係)



目次

は し か き	前掲	一
教主金光様御言葉	前掲	一
真心応知大人頌文		一
三代先生を偲びて	伊勢教会長	二
御先代の親先生へ	名古屋教会長	二
先師の芳躰を偲び奉りて	彦根教会長	三
親あつての子	藤原教会長	六
先代親先生を偲びて	奥山勇蔵師	八
師 神一体の信	第一回座談会	一一
真 一 心	橋本三郎師	一一
先の親先生を偲びて	河野芳吉師	一三
先代親先生を偲びて	菅原信師	一四
先代親先生を偲びて	第二回座談会	一六
若き日の親先生	第三回座談会	二二
日々のおすゐた	菅原幸一氏	二九
冬の暁の憶ひ出	川畑勝次郎師	三一
比られて	大森繁師	三四
	大森繁師	三六

眞心廣知大人頌碑 (写)

(金光教管長、大教主、金光家邦閣下墓額)

靈驗ハ神ニ榮シ道ハ人ニ依テ現ハル蓋シ之ヲ高阪松之助君ニ見ル君ハ京都ノ人嘉永三年十二月二日烏丸通万年町ニ生ル、父ハ七兵衛、母ハ加津、君ハ其ノ長子タリ、家祖ハ能登ニ住シ、代々養ヲ以テ業トナス、功アリテ苗字帶刀ヲ許サル、君實性円満闊達ニシテ商ヲ営ム明治十八年十一月偶神縁ニヨリテ金光教ノ信仰ニ入ル信心日ニ進ミテ十九年四月神道管長ヨリ教導取試補ヲ授ケラル、同年九月大津神山村ニ移リテ布教ヲ始メ、廿一年四月上北園町ニ金光教会大津支所ヲ設立ス、神徳四方ニ輝キ道遠近ニ伝ハル現大津教会所即是ナリ、而シテ手続ノ教会ハ滋實、三重、愛知、静岡、福井、富山、石川、長野、各県ニ亘リ其ノ數、實ニ廿有余ニ及ブ、本教別派獨立ノ後三十五年七月金光教管長ヨリ大講義ニ補セラル三十八年四月推少教正ニ大正十二年八月少教正ニ累進ス、老後教会長ノ取ヲ嗣子、由治郎ニ譲リシカモ終世猶教導ニカヲ致セリ、十四年十二月十二日満ミテ帰幽ス、時二年七十有六、長等山麓小肉墓地ニ葬ル管長生前ノ功ヲ實シテ諡号ヲ授ヒ推中教正ヲ贈ラル嗚呼君ノ如キハ克ク神徳ニ浴シ克ク教恩ニ応ヘタルモノト謂フベシ

大教正佐藤範雄閣、權大教正高橋茂久平撰、楠堂目雅博書

昭和四年十二月

有志教子建之

大阪 太田 傳 刻

三代先生を偲びて

高 阪 正 太 郎

「自分は因縁しても神徳を遺してあるから心配はない。教会は弥や御比礼を立つぞ。しなしその徳に慣れど油断してはならぬぞ」という意味のお言葉を、三代先生は現先生へ言い遺されたと承りました。

何という信念であらうかと深く感じました。平素は非常に謙虚であり、内省の強い御方であつたのに、どうしてそれだけの力強いことを仰有つたのであらうか。私はその点を深く考えさされたのであります。

先生は、その個人としての性格は前記の通り極めて遠慮深い御方でした。長年のあの御結界の御奉仕―

御先代の親先生へ

谷 村 萬 藏

方とは、注意して見ると、なんとなく相異するところがあつて、よく判るものです。

故先生は、御若い頃には容易ならぬ御修行をなされたのでありましょう。御両親の膝下で、御成人なされた先生とは思はれぬ御言動を拜して、感銘することゝな要々でありました。

琵琶湖のように、穏やかで広い御心と、ささ波のこまやかな御心使いを以て、御指導を下され、遂に湖の水のように、清らかな、御生涯を御閉じになりました。○

内親の許で成長した人と、他の教会で修行して来た

○
故先生は、この不肖の子に、大きい期待を御掛け下さつて居つたと、うぬ惚れて居ります。御生前中に、その御期待に副ひ得なかつたことは、真に不徳の致すところで、御恥なう御座います。一日も早く、思召

先師の芳躅を偲び奉りて

中村 他家次郎

に答へ奉りたく、日夜努めさせて頂いて居ります。若し命短かく終ることゝあつたなら、孫子の末までも生き通して、必ず御喜びいただきましょ。御霊殿のう、シツカリ御照覧になつて下さいませ。

我が親教会に於てなせられては、本教々団の創設せられて、向もない。去る明治二十一年の頃、初代老先生が御神命を奉じて、さゞ坡の志賀の里に内教せられましてから、今や既に三代をなさぬせられ、七十年ともなりますので、来る十一月秋の念もゆたかな季節をもちて、その記念祝祭を御奉仕になりますことは、わたくしたち内流の等しく御同慶に堪えぬ処である。

この時にあたり親しみ深いわが松蔭会々誌「松のみなげ」の特別記念号を発刊せられるということは、洵に難有い御企画なりと、心からなる感謝をささげるのである。就ては編集子なら、かねてよりお求めをいたぐいて居りますので、いたらぬことなから聊々専ら先師の御跡の事ども偲はせていたゞき、記させていたゞくこととする。

さて先づ初代老先生の御高徳にあらとられたことは今更申上ぐる迄もなく、先輩諸師に於て既にたゞたが語られもし、記述されてもいるようである。殊に私のごときは初代先生の警政に接することも少く、従つて御教導をいたゞく機会としては殆んどなかつたというてよい。今日まで本教に於ける教会々、各々その特色をもつて居ることは申すまでもないが、内流を同じくする教会の、自づ同門の色彩あることは、当然のことといはねばならぬ。私の両親が親教会に御引寄せをいただいでいた頃、件われてお参りして老先生の御教導を頂いたことのある古い信者の人等で、よく性神（みよがみ）といつ言葉をつこうて居ることを耳にしたことのある。唯つ一信者の人たちが、思ひもかけぬこのような言葉を口にすると、これは、全く老先生の力強き御教導々、

信者層までも深く浸透していたことを物語るのであるまいか。このように老先生が事に当り折に融れて、不即の教導に力を致されていたことは、真に尊く難有いことと慕ひ奉られるのである。

次に二代教会長先生には、初代老先生の御跡をお受け継ぎになりましたが、当時既に相当多くの手続教会もあり、自然教会の基礎も定まり、整えられていたので二代先生には重き御責任を感じさせられたことと拝察する。不肖の如き青年時代から終始容易ならぬ御恩顧を蒙り、殊にわが彦根教会、肉親のおみづえをいたすに際には、何くれといひしれぬ御心痛と相煩はしたことを偲び奉りて、感激の外はないのである。

二代先生は何となく慕ひまつらるべき高き御風格を真えて居られたように拜せられたが、初代先生が教会の根幹に深く培うことに御尽し下されていたのに対し、二代先生は比較的外部への伸展に御着眼なされたようである。之れは全教的に観て、対外面際の重要視せられるという時代の趨勢でもあつたのに依るものであるとも察せられるが、先生は或は地方教務機軸の取置にも御任命を受けられ、或は本教議会議員にも送出せられ給ひ、本教の要職にお立ちになり、御尽し下されたことは申上ぐるまでもない事だが、更に本教の将来に思ひを致されて、「青年育英」ということに御手を染

められたことは、当時としては、実に莫数の御功績とも称え奉るべく、尊きことである。更にこの二代先生は、御歳尚お若くおはしなから御病苦に悩まれ給ひ、洋々たる御前途を残し給ひて遂に永き御別れを申上げねばならなかつたことは、真に可惜しき極なりと申し上げねばならぬ。

私は茲に過去を追懷して、感慨無量なるを禁じ得ぬものがあるのである。

最後に三代師の大人の君には、初代先生が御教会の根柢を定められ、二代先生が更に之れを一層固く築かれたる御跡をお受け継ぎになりましたが、師の大人の君は未だ四十年という最もながき歳月を終始御取次の道に専念御精進下されたことは、御生前、現教会長先生に御述懐せられた御言葉とも思ひ合され、洵に慕わしくも尊き限りである。

先生は初代先生の御風格を最も克くお具えになつていたようである。常住春風のそよ吹くともいふような御姿で、腰をお立てにならぬということ——願うてもかなわぬ尊い御性格——之れは初代老先生が三代先生のためになつてお許しになつていたと承るが、これ全く先生が、教祖様の御教にもとづき、多年不即の御修養を積まれていたのによるものと拜せられる。私たちが、御衣前にいつ御引寄せいたぐいても御取次の座

に先生を拜せぬこととはなつたようである。そしてこれは私たちにとりて無限の力とも仰られ、この上なきよろこびとも慕ひ奉られたのである。

私は教祖御理解第七十七節人の悪い事を言うものがある。……との御教を拜し取次者の責務の重大なることを思ひ、自試おく所を知らぬのであるが、先生はこの点に於て常に範を御示し下されていたようである。先生はいつ如何なる場合に於ても、人の悪口など聊かたりとも仰せられた事なかつたようで、まことに尊きことと申さねばならぬ。

更に私は、なにくれと、いつも巨細にわたりて申し上げお取引をいたゞいていたものであるが、或は本部巡教などを命せられて、御用に出仕して居る場合など、あたたか御自身の御事の如くに思召されて出先の教会に宛て私への慰問激励の御懇書を頂いたこともあり、或は其他御用を頂いて出仕する時など、共に御歎び下されて、御取次下されたこともあり、唯々難有くて感激にむせんだこと幾度であつたらうか。

斯く思ひおこすまゝに、筆を運ばせていたゞけば限りもないが、之を要するに初代先生より三代にわたり御用の面に天々特色のあられたことはさることながら、吾人と一以て之を貫くしといつてゐる通り、わが教祖神が人が助かりさえすればそれで結構であると仰せ

られたる御精神に徹せられて、天々御用を頂かれていたことは申上ぐるまでもなく、拘に尊さ限りなく肉教以来七十年を聖来りたるその上を顧みて、今更に萬感交々いたるを覚ゆるのである。

今年は立教百年を明年にひかえ奉りての、最も意義ふかき御年柄であることは今更申す運もない。この時にあたり、肉教満七十年記念祭をお迎え申上ぐるのであるがわが親教会御三代にわたりての御跡を慕ひ御徳を憶ぶ奉るにつけても希くは最も清々しく、御奉仕相成らんことを切に祈らせていたゞくものである。

斯くてこそ現教会長先生の殊き御宿願にも答えさせて頂くことともなり、更に進んで我々祖神様か子どものことはおや々頼み、おやのことは子が頼み、大地のごとし、おいよかけよて、頼みやいたしと御神傳下されたる御神意にも忝ひ奉るべき眞の信心をいたゞくことともなるのである。



親あつての子

手続は生ききて居る

篠原教会長

奥

山

勇

藏

この度、大津教会布教七十年祭に際し、何か書く様にとの事であります。私如き不徳者の御高徳なる所の教を筆にすることは所の御徳をあるいは穢し奉る事になりはせぬかと恐れ入る次第であります。

小生大正六年五月一日、藤井はると云う信者の方の手続によりまして、始めて初代先生の御託に御引寄せを頂きました。

当時先生は小川町の御隠居の方で常にいろ／＼の教を頂いたものであります。

ある時「なあ奥山、信心は大きな信心かよい迷い信心ではいかぬ一心と定めいしと教えられてあるか同じ神様に頼うのなら、本部の会計を自分一人に引受けさせて下されいと頼やよい、頼いか叶えは頂上、叶わねば元々ぢや」と仰せられたのであります。当時私としてはこの御教を頂いてもこんな事何とも考える様な事ではないと、受け流しに終ったのであります。後になつて、これこそ先生のお道をお肉きになる一つのお祈りだと気付かされたのであります。あの時このお言葉を神の一言と有難く受けて、その心になつて信心

させて頂いたら素晴らしいお陰を蒙ったかも知れぬ、と残念に思ふのです。後の祭りであります。

教祖は市村光五郎という方に「信心は押すことか第一ぢや」と言われてあります。

初代先生、御道肉きには、この押すと云う信念でのおりの棟でありました。（御自身自ら知らぬ土地に出向かれ、或程度道が抜かれればそこを人に譲り、又次の土地に出掛け、相当道がひらけば人にゆずられ、種々御苦労をなさつたお話もあります）

私共もいろ／＼と苦勞の中、御引寄せを頂く様になりました。向もなく、教会の認可を得る事となり、月々本部参拜も出来る様になりました。追々教会建築もさせて頂き、次々道の肉け行つた事は全く恩師の押し下さる御力、恩師の日夜御祈り下さる賜物と思えば勿体ない次第であります。

いづこにも近隣教会の信者を取つたと云取られたと云つたこともあるのであります。これは全く押すのではなく「引張りあいでお互に「頂の仕合」と云つたことになるのであります。

初代先生は、宏大な御恩を蒙るばかりで、何等御喜
び頂く事も出来得ぬ中に大正十二年十二月惜しくも御
別れ申上げる事になりました。二代先生はそれ以前に
御帰幽なされこうに三代先生は御継承下さることとな
り、私共はことに三代先生を親先生と仰ぎ何なと御助
け頂いて参つたのであります。或る時何か御伺い申上
げると先生は「フン」そうかなあと仰せられたが、そ
の御声なり、御態度が全く初代先生そのままに感じこ
の三代先生の中に初代先生がお在しますものと愈々有
難く頂き奉る事が出来たのであります。

これは終戦直後の事、松沢松蔭会長よりお手紙を頂
き、それに仍り、少し惑うというな迷つて居りました
或時、靈前でふと、お前迷うて居るな何も迷う事は
ない、此の後は大津教会にどう云う事が出来ても、私
の身体がやへ私と一体がやへと思うて居れば間違は無
いのじやと先師のお声の如く變の如く感じたので大
いに考えを改めたのであります。

幾百年経とうとも、この親先生は、私共子教会を常
に守り、押し進めて下さつてあるものと信じ奉るので
あります。

又三代親先生が或る時の事、私方の信者か不意の難
を受け急の事として篠原教会より大津教会の方へ近いな
うと申して、大津教会に参つてお願い申上げると、先

生はお願ひしてやるともやらぬとも仰せられず、なぜ
ここままで来るより自分の教会へ電報でもお願いせん
のなと道の大事を教えられその人は心得違ひを致しま
して相済まぬ事でありましたと云つて詫びて来たこと
もありました。これ先生の押すの御心ならと伺ひ奉る
のであります。

昭和三十三年十月篠原教会布教記念祭に、先生には御
斎主にお立ち下されたとき、御神前に進まれ、教
祖大衆の御祝詞、続いて布教記念の祭文になると急に
お声が低くなり、眼には涙がえうるませられお声も絶
え／＼に辛うじて奏上を終らせられたのであります。

この御様子、御心中のほど、よく解りませんが、こ
ろに布教記念祭を奉行させて頂くとお願い申し上げて
より半井もの間、お心籠めてお願い下さつて居たれば
ここの御感涙と拜察致し、神様の御大恩と共に、親心
の深さを悟つて泣いた事でありました。

二十何ヶ所の出社教会に対する親先生として斯くも
深き御思ひをおかけ下されまして日夜に御取次下さる
ものと思へば、親の思ひを子知らずで唯うなつに過
して居た事は今更なから勿体ない事であります。

想へば実に相すまぬことであります。氏子あつて
の神、神あつての氏子、上下立つように致すとの御
教も今更に信心は押す事な第一との神意を本心に頂き

たいものと存じます。

一ツ教会、教師たりとも、単独のものではなく、教団のつながり、手続の親教会とのつながりの様な形で皆、つながり関係をもつて居るので今日の形をなして居るのであります。

これは丁度、木の根幹と枝葉とのつながりの様なものであります。幹を離れた枝はやがて枯れましよう。そこに大切な道あり、切り離す事の出来ないものゝ吾々今日の姿をなして居ることと思います。

我々の親族血縁のつながりの様なものは古くなりやすく新しいのが追いつく。出来るから古いのは止めて元は親類であつたかというようになり安んず。

第一回 先代親先生を偲びて

四月二日、三代先生の百日祭が美はしく仕えられた後、滋賀荘に於て 参加者 十一名

先生「本日は御用御参端の中より、よくこそお鎌合せ御参拜下さいました。叔親先生も賑はしお暇が下された事と存じ、厚く御礼を申上げる次第でございます。就きまして、三代の後を承継して、守成の大任を買ひ、進んでは一層の向上、発展、次男勝りの大みなげを蒙らせて頂いて、信と孝との大

道のつながりはおみなげのつながりだから切り離せばおみなげはダメだと云う事を考えねばならぬ。

血のつながりは切つても別に助けられていると云う訳ではないか道のつながりをそれと同じ様に考えたならば大変な考え違いとなるのではないか。

唯、大衆に参つて居るから、親子教会のつながりは切つて居らぬと考えるのは全く考え違いであり、我が出て居るのではないかと考えて見たいと思うのであります。よく考慮して子孫までも伝え置きたいものであります。親教会あつての篠原教会である事に思いを致しますと御手続の肉縁の存続する限り道の御比礼は一筋に流れ伝わつて親も栄え子も栄えさせて頂けるものと確信を持つのであります。

道を進ませて頂かねばならぬ私と致しまして、省みまされはまことに不従の身、容易ならぬ重責と思いを深うするのでございます。どうか各出社の先生方の御祈添え、御努力を切にお願ひ申上げたのであります。今更申す迄もない事ながら、本教に於きましては「お手続さし加て経系となり、」あいよ、みけよで立行く理に

か緯糸となつて、無限の発展、繁昌という美わしい錦を織り成してゆく」とまあこのように思われるのでございます。大津教会に於て、初代、二代、三代を通じて、その点はどうあつたか？という事を中心にお話を頂けますと有難いと存じます。奥山先生からどうぞ……」

奥山「老師は、常に、信念と真心とを分けてお話になりました。私は神様と道といずれを重きにおいて信心を進めたらよろしうございませうか？と伺いましたら、それは云うまでもないこと、第一は神様、第二に、道には道の努めがある、人に入への努めがある。第三、師とか、親教会に盡すこと、と御教え下さいました。私は尔来神様の思召に添わせて頂くようにし、又身の上に起さてくる出来事は何等も修行せよとのお差向つと解らせて頂いておなげを蒙つて参りました。又第二、第三の御教も実行すればする程、有難い事だとわたり、成程々と納得しつつ、真心信心を徹させて貰うてきました。」

先生「奥山先生、何か初代先生の思ひ出話をなさつて下さいませんか。」

奥山「小川町の御宅の方へ何う度毎に、有難い御話をして下さつて、一歩／＼信心を仕込んで頂いたも

のでした、今も目に残つて居りますか、中の間の陽にお米俵が置いてあつて軒で重り出される時、一寸拜んでから出して居られました。あれは豊橋からお供えなさつたように思つておりましたか、豊橋の先生、あなた、何かお聞きになつていませんか？」

安達「私は、そう古い事は存じませぬが、なんでも、うちの先生が親教会へ御参拜の節はそれは大変な事で、一週向も十日も前なら、豊橋中を歩き廻つて、種々珍らしいものをお集めになり、控えの向へ一杯並べてこれは親先生様へ、これは奥様へ、あれは御子様へ、というように、それは／＼愈入りにこまやかなお心づかいをなさつて居られました。という事です。又幼い頃の思い出に、私らはお棚の上に珍らしい物や、立派な物がお供えに上つてゐるのを見ると、「あれはどうせ大津へ行くのに次つてゐるからだめだ——つまりそういう物のお下りか子供の方へ戴ける可能性は無いと子供心に割切つていた次第、子供が可愛くない事はないのですか、それ以上に親様の御恩に感じ、親様を大事にする心が深なつたのですね。」

大森「フーム、成る程、いいお話ですね。お手鏡さしにの真髓だと思ひます。」「お手鏡さしを信心の親子

の続柄肉係に就いて、型に嵌めたようになる形式に墮して生きた精神を夫の封建的弊害をこえ伴う場合も起らないとは限りませんから一部に、手続輕視の風をも生じるかも知れませんが、それは形をのみ見て心を觀ない論だと思ひます。「御手続さしの本度というものは、親から慈愛—子から敬愛の情緒の交流、融合したもの、つまり冷たい理に基づくものでなく、温かい血の通つた情に依つて立つ親子肉係だと私は思ふのですかね。」

先生「これは他所なら聞いた話なんですが、某先生が親教会お取次ぎを頂かずに御本部参拜をしておられたところへ親を無視して本部へ参るようなものは教師の資格は無い」と親先生から教戒を受けられましたか、神の氣應に叶わぬからでしょうが、原因もないのに俄かに聲になつれました。但しお結界に座っておられる向中はよく聞えて、御用に差支えなかつたというのです。奇應な事ですかな示唆されるところ多い話であると思ひます。」

先生「伊勢の先生は内面からよく御存知の事と思ふのですが、初代先生が親教会をいかに頂いておられたか——お話をいたゞきたいものです。」

高阪「どうも私は余り近過ぎて、所謂、山に入つて山を見ずの類かも知れません——初代は神徳人徳

兼備の方で、前途大いに為すあるところの五十才という年に御隠退になつたのです。その動機は御承知のような事件の余波を浴びられての事です（向くところによれば親を深く思われる一念から面を背して諫言もされ、誠を盡されたのです。逆に御不興を買う結果となり、しかも事終つて後何等責任を負うべき筋合いなきに不拘、自ら親に殉ずるお氣持から御隠退なされ、師に対する節操を立て貰ひれたそうです——註 筆者）

二代先生は非常に情の深い方であられましたので初代を仰ぎ、お仕えなさる上に、実意を盡されたであらう事は疑いを入れません。」

中村「私は二代先生の思ひ出について語つて見たいと思ひます。私か十六才の時父の後を継ぎして頂いたのです。これは重大な事になつた——と大いに緊張致しまして、何か一つ修行をさせて頂こうと考えて彦根から大津へ徒歩で参拜した事もありました。いやもうヘト／＼になつて新くのことにお成前へ辿り着いたのです。その時、初代先生も二代先生もよう未だ／＼とお寝めに預りいろ／＼おいたわり下さいました時の感激は、未だによう忘れませぬ。」

二代先生は、教育もお受けになつておられまし

て、平田篤胤全東など御愛読されていました。御用の上については議員や数々の役取にもお就きになり、交渉、折衝などには優れた才能をお示しになりました。文化の方面に大いに志を伸ばしたいというような御気風もあり、青年の育成に就いても非常に関心を有せられて、特に高阪正太郎先生菅原幸一先生等に囑目して大成を祈っておられたようでした。

御病身ながらも、時には徹夜祈念をなさる事も度々でした。自分としては修行生に要求は出

師・神一体の信

初代敦實教会長橋本松之助師は壮年の頃、難症の眼病で困りまして、名医名業あらゆる手当という手当を尽くしたのです。何の効も見えず、追々悪化の一路を辿つて遂に盲目となり、懊惱・苦悶・身心ともに暗黒の底に落ちてしまつていたのです。その時、神さまの有難い思召しを蒙つて大津教会に御神縁を結ばれお道に入らせて頂きまして、初代先生の熱烈なる御祈念と懇篤なる御教導を賜わり、大いに感激して先生の仰せに露背なじと信心させて頂くうち、僅か二週間にして

来んでなアレとお我らしになつた事もありました。何にしても壮年四十八才を以て御国替えなされた事は惜しむべきことでありました。

橋本「僕が、偉いへ大津の先生か——初代も二代も先代も——と思うのは、絶対に出版社の先生の悪口を云われた事か無いらう事や、他の人云うて来ても絶対に合榎を打ちなさらん、大概の青やつたら、不足があつたらつい口へ出るし、他云えはその話に乗せられるとこやぜ。それなだゞの一度も無かつたあの点敬服したねいへ文責在 大森」

橋

本

二

郎

清眼となる大靈験を受けたのであります。盲目兩眼の奇蹟を我身に体験した父は神徳の宏大なると道の教えの尊さにすっかり驚嘆致しまして、一旦は魔物になり果てたと思つた身を助けて頂いたのであるから、救われた我身を神さまに捧げて、御用の片端にも立たせて頂きたいと発心するに至りました。こういう御縁なら親教会に修行に入らせて頂きまして日夜に信心を練りに練り鍛えに鍛えて頂き、親先生即ち神さまへ神さまは親先生の内に現われ下さる一故に神の前立ちたる親

先生を信じ、継る事か、そのまま神さまを信じ継る事なり、斯くて親先生を通して偉大なる天地の神さまと直結し、御取次を仰いでゆけば天下に恐るゝものなし——の大信念を掴得し、勇躍して布教困難といわれた北陸の教質の地に第一歩を踏み出したわけであります。こういう信心ですから神なり親先生へ、親さまなら我身へ、我身から信者へと、恰も渡桶をなけて水が流れ込む如く、お蔭が立ち神威赫赫と輝き亘り、早くも翌年には教会新築が出来、日夜に増況を望したのであります。想えば、親あつての子の感を深ういたし、この御恩主々世々忘るゝ事は出来ないものであります。

「靈驗は神に発し、道は人に依つて伝わる」とは親教会玄肉前の真心玄知大人頌碑の名句であります。道を人に伝えて眞の信心をさせる——殊に道の教師を養成する事か、初代先生の思召しに一番よく適う事であると父は考えまして、このお蔭を蒙らせて頂くようにと念願していたようであります。特に親先生の思召しによりまして、後の大津二代教会長高阪田次郎師を実地修行の爲め、教質におまわりのになりました事について、父は非常に感激いたし、いかにして此の厚き御信任に報ゆべきかと日夜精進を怠らなかつたのであります。肉の松沢西太郎師、湖北の井上宗太郎師等

辨々たる人材も教質にて修行され、後にお道の上に大きく御用に立たれた事は初代先生の思召しと御祈りによる事は申す迄もありませんか父も亦、聊かお役に立ち得て喜んで居る事と思つてあります。

父は初代先生より賜つた御教を丁寧に書き残して呉れましたが父の日常はこの教会を依り所として所謂信心生活を行じていた事か思い合はされるのであります。かみしめる程信心の味の出てくるのは御教であります。少し記載します。

○ 仏教王国 雪の北陸も何の恐るるに足らんや、強き信念と健康なる体力により必ず金光の道は開けるぞ（布教の前途に）

○ 神の手代は主神金光大神の代理である。心を大きく度胸をきめて実意を以て氏子に教を取次げ——金光大神の後にござるから安心せよ。

○ 御取次する者は、神に信ぜられる氏子となり、人を見通す力を授けて頂け。

○ 人情に溺れて神の道を破るなよ

○ 御取次を有難うお仕えさせて頂け。実意な者はお蔭が多いぞ

○ 祈念力を強くせよ、御比礼を左右するぞ
○ 参る氏子の懐に應じて教えを語らすべきものぞ。

○ 親先生は教え子の特徴を生み出して御取次の真理を悟らしめよ。

○ 真理は南くものに非ず、心より練り出し、悟るべ

眞

一

若狭教会長

若狭教会は明治二十五年十二月二十八日に公認を受けました北陸布教最初の教会であります扱て我々母河野ざん刀自か明治二十年春四月初旬天津教会へ紺屋ヶ岡の山口イワ棟の御手引にて参拜いたしましたのが最初でありまして次ぎ／＼と有難いおなげを頂き居る内に父河野源吉大人が二十一年秋大病をいたしましたして九死一生のおなげを受けましてこれより夫婦打ち揃ひ眞の信心の道に入れて頂きました。母は度々天津へおまゐりさせて頂いて居りましたが拙宅へも統々と信心を求めておまゐりの人があります／＼とおなげを頂く人が沢山出ましましたので高阪初代先生より大湊の町にて家をかり人助けの爲めに御取次ぎいたす様御命を頂き教師岸田平七氏を表面に立て、布教をはじめました。此の頃拙宅で大被講(宅祭)をいたしますのに沢山のおまゐりの人があり、又大湊の布教所へ母に負われておまゐりいたしましたことをおぼろげながら記憶して

心

さものなり

○ 極意は見習うべきに非ず、心よりあみ出し悟るべきものなり。

河野 房吉

居ります。越えて二十三年若狭へ布教いたしますにつさまして、父は大津教会へ五六十日間修行に置いて頂いたのです。その留守中母は家業に精励いたし子供六人を育てて居りました。或る日のこと私と姉(福知山教会へ嫁す)が遊んで居ります内に姉が過まつて持つて居ります竹の棒で私の石の目を突きました。痛さに耐えかね泣いて居ります私を、母が抱いて乳を吞まして呉れたことも覚えて居ります。だん／＼腫まして苦しみますので母は心配の余り大津にて修行中の父へ知らせまして一度見に帰えるようにたのみました。父は早速この由を申上げ御取次を願ひ一寸見に帰ることを願いました。その時先主は「フンお前が見に帰えつてやつてそれで治るのか?」此所へ教会へはみんなが頼いに見えるのだ神様に御願ひ申して見に帰るに及ばんと申されまして御許しが出るので帰えることも出来ず心配して一心に御廻りして居りました。母は神様

に一心に御願ひ申し一つの眼を四ツに疾して下さい行
未長い子供が今失明したり片目になるようなことな
れば一生難儀いたします。タトエ片目より見えません
でも結構ですドオム一眼は失明しても見た目にツブレ
たりして醜くない様におなげ下さい。と願ひくれたの
です。向もなく私の両眼と母の両眼かはれ上りました
ので母は神様を頼ひ通りおなげ下さると大層によろこ
びまして早速大津の父の許へ御礼御取次ぎを願ひまし
たとの事です。日ならず兩人共全快のおなげ頂きまし
たが私は七十才の今日左の目の視力は殆んどないのに
突いた右の目で自由を適えさせて頂いて居ります皆様
御覧下されである通り両眼共普通によく見える目に見
えましょう。目ツカチとも片目ともいわれずに今日あ
ることは親のなみくならぬ信心のおなげとよろこん
で居ります。今思ひ返しますと七八才の頃までよく食
事の時などに片方の目を手で押えて視力を試されまし
てそれが度々のことでしたのでよく泣いたので父が泣か

先の親先生を偲びて

金沢教会

菅

原

幸

信

先の親先生の百日祭の日も尚近くなって来ました。
先の親先生のことを書なして頂くということが、で

きるものとは思いませんが、先の親先生の御在世中、
親先生より何々の御言葉があつたときのことなら、一

んでもよい／＼と申したことがありました。これはそ
の内に両眼共に視力のおなげが頂けるかとの親の切な
る思ひであつたのです。私は四十二才の時に母を失
まして今更なから母の慈愛と篤信でありましたことを
憶んで居ります。信心はじめ大津へおまいりしました
時に初代先生より「おぎん様あんたは千万人の中の
人のおなげを頂くから先をたのしみに信心しなさい」
との御言葉を頂きましたことか終生のよろこびであり
自慢でもありました。母は生涯不平不足愚痴を申しま
した事を聞いたことかありませんでした実に有難い信
心を持ち続け信心はじめより神様の御言葉を直々に頂
き又お姿をも拜ませせて頂いて居りました。大靈祭後
氏の講話をいたしまして小肉墓地へおまいりいたしま
したら古い大津の信者の方から手引をして下された山
口イワ様のお墓を教えて頂き昔を偲びまして心から御
礼を申しましたことでした。



二記さして頂こうと思います。

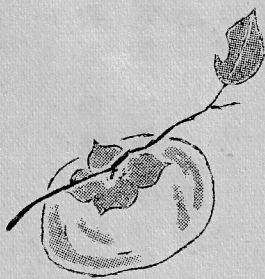
一昨々年の秋、親先生を金沢に御迎えして教会の五十五年祭を仕えさせて頂くことになりました。

大祭の前日、親先生、高阪先生、そして隨行の御信者の方々御到着になられました。御拝礼を終えられ、御部屋に入られてから、後のこと、御広前では、大祭の準備等いたしておりました。親先生は御広前の火鉢のところに来ておられ、高阪先生と何かとお話しておられました。同じく御広前では玉事の用意をしており、丁度近所の子どもで少年少女会の集会に集る子らが参拝しておりました。そこで、玉事の用意は比較的にやさしいであろうからと、その手伝いをさせておりました。親先生は私たちのそうした様子をごらんになっておられたのでしたか、「御大祭く」というてへ集しい嬉しい心の子へ氏子へ等が寄り集って、賑やかに、丁寧にするのが、御大祭であるなあといわれ、私、子どもの誰彼なく話しなけれやうな風でありました。私は「はあ」と中途半端な答えであつたように思われます。

翌日は、大祭にて、親先生斎主となられて御仕え下さり、御挨拶を頂き有難いことでありました。なお、その頃は、旅行は大丈夫であるといわれておられました。たが、血圧は二百のときもあると云うことでありまし

た。しかし、何ともないような御様子であられました。病気の症状を気にして悩むところがなく、一筋に神さまに建り任せ切つて居られる御信神からの泰然自若の御態度であらうなと思わせていたゞきました。翌年（一昨年）のこと、親先生が高阪教会に御出ましになられましたときのことです。御挨拶申し上げましたとき、親先生は、私の方へ「当時ニオ」の子どもの様子をお尋ね下さいました。それから「子どもは可愛いであらう」といわれ「……親からへ大争に」してしろうたのである。子へは次第送りであるから大切にさせて貰わねばならぬ……といわれました。読いで、来る人へ、親先生は御応対なさつておられました。

終りに、親先生は常に私どもの上を御祈念下されておられましたこと、また、時にふれ御教導下されましたことを想起しては御礼申し上げるのみであります。



第二回 先代親先生を偲びて

(33・5・19 前夜祭の後 10—12)

お仏前一杯の参拜有も、それぐ帰途に就かれたのを見送つたあとの
静寂な一室に、時々サーツと降りしぶる雨脚の音を耳にしつつ、内輪

(松蔭会員)同志の泣みぐとした雰圍気の裡に……

教会長先生から、口を切つていただく

先生「皆様御苦勞さまです。まことに光陰は矢の如く

親先生御帰幽後、既に約五ヶ月経過いたしました

今日、私が特に感じております事は、信者さん達

が著しく元氣づいて来られたという事なんです。

「依存から自奮へ」と申しましたようか、なんでも

我々信者が確りやらせて頂かなければいなん——

こういう氣風が盛り上つてきてるようなんです。

これというのにも一に親先生の靈神の御加護であろ

うと感じて居ります。正に——御愛しみの御心は

現世に交らせ給わず。有難い事でございます。

それから先日、難波親教会へ参拜の節、奥様から

父の事を評して

「一見、古武士的風格を想わせなさるが、接して

みると親しみの湧く先生です」

と仰しやつて頂きましたが、ほんにその通りです

なあ

高阪「そうですね。謹嚴の反面に、ユーモアな面も

あつて時折りホカン／＼と滑稽なことを言つては

(笑わそうと企ますに)人を笑わして居られまし

た。

司「名古屋の若先生、何か御感想を——」

谷村「私は親先生の驚咳に接する期間が短かつたし、

いつも御結界での先生しな仰いでいませんのです

が、何時も、何かとこま／＼と尋ねて下さつて、

(清愛の濃やかな先生だなあ——)お父さんのよう

な伯父さんのような、とても云いたいような、お

懐かしい、お慕わしい感じを受けました。

川畑「お結界の御取次ぎも、硬い理窟的には仰しやら

ず、穏々でお優しく、そうして信心上ではへ義に

於ては、キリツとしたところがありました。

高阪「先代は求道心がお強かつた。それが一生涯を貫

いておられた点——まことに感心させられます。

甘才の頃、親様から、自由に処世の方針を立てる

かよいと云つて頂かれ、その時「私はお道につかして頂きたいです」とお答えになり修行生としての御起居が始まったのです。勞頭に親様から、「親子と思うな、修行者として行動せよ」という意味の厳しい宣告を受けられ、素直にそれを容れられて、内外の掃除をはじめ、師に仕え、信者に対する心配り、祈念、心行、と自奮自励只管に修行に打込んで居られました。或る時の事、便所掃除に精を出しておられるところへ未合わせた或る人々（出社の信者の方で時たまにしか参られんので若先生とは知られんのです）丁寧なさり方を見て感心しつつ「あなたは何処から見えられたお方ですか？」と聞いたそうです。―それ程真剣にやつておられたのもあり又我一修行生なり、というお気持ちになり切つておられた事のわかる挿話です。

川畑「當時、田中壹三郎先生をその様子を見るに見兼ねて「いかに修行とは云え、親子でありながら全くキツ過ぎる」と抗議されたと承つて居ますか、惡愛の情を（所謂、可愛いを）捨ててお仕込みなされた初代先生もお偉らなつたし、いささかの不平不満もなく親心を有難く受け、親心に添つていかれた先生も立派な事だつたと思います。美談や

と思います。」

可「御婦人の先生方ならもう何を……」

橋本夫人「自宅では家族が集まりました時など、あの事、

この事と数多い思い出を語り合ひつつ、本當にお優しい先生や、とお慕ひしていましたんです。それ……へ暫し声杜切れハンカチを当てて歎息を押しえていられる――今日のお祭に、若先生の正服のお姿を拜見して親先生が御立ち出でになつたかと我が目を疑うような気持ちで……髣髴とでも申しますんでしような？、知らず／＼涙がこぼれました。――深い感動に、一座しゆんとなる――

安達「へ感極まつて、近（き）づいて出るように」本當に情の厚い／＼先生でございました。豊翁（豊翁）へ教会へ戦災で全焼し、やつとの事で復興させて頂いた直後親先生が單身お越し下さつて奉告祭をお仕え下さいました時の懐い出るよう忘れぬのです。「女の身で、よくここ迄復興させて頂いたなァ」と被仰つて頂いたのですか、それが柱を一本／＼撫で探（さぐ）り下らぬ女／＼と仰しやるのですへ口先きの／＼お言葉だけでなく、心の底から無量の思ひを込めて云うて下さつているお心を知つて一同が感に打たれました。

安達「安は、重い責任を果せそうにございせんか」

とつい口に出ましたり。先生は「自分の力で責任が持てるものではない。人向心を教れて、只管神慮の任々、この身を捧げて神さまの召使いという心で、御取次御用に獻身させて頂いておればよい余の事は神さまの思召しで立行くようにはならつて下さるものだ」と御教え下され、重ねて、修行はせねばならぬ、修行は自家で出来る、といういふ豊富なる御体験をお話し頂きました。それから又六十五年祭の時、かねて先生には油濃に食物は差控えておくように御注意は承っていたのですから、他の先生方と一緒にしましたら全部お着をおつけ下さつて、大変喜んで下さいました。それで一同の者が、至らぬ我々の心をお受け下さつたと云つてみんな喜び合つた事でした。

川畑「御一主を通して、修行を心掛けて居られたようでした。今日は暑い、今日は寒いを云われた事がないのです。他の人がそう申した時は「そやナ」とだけです。一主、扇子や団扇はお使いにならなかつたですなア……（と無然たる面持ち）先生「食事について「嫌い」と云われた事がないのです。」「私は一寸遠慮させて貰ひます」と云われた（嫌いとは云われぬ）

全「私がこちらへ参つてから早々の事でしたな、或

全

る日これから外出しようとして空を見上げて、えい、雨が降つて来やなつた」と咳いたのか父の耳に入つたのですね、お道の教師たる者が何たる不心得な言葉を出すか！というので天地の天恩について、導々と一時向に余るお説教を頂戴したんです。ギツイなあと思ひましたか、些細な事で御神慮に適わぬ点は、飽くまでも一々へ機会を外さず御注意して下さつたものです。何でも一人前に仕込んでやろうという親の思ひの深さには只々頭が下なるばかりです。

「島田先生は此所で御修行中の事でした。——或る日、親先生から「なあ島田さん、修行というのはボヤツと座つて居てはいかんのじや」と一言云われて奥へ這入られたんです。そして一時向程経つてから再びお玄前へ出て来られて、玄肉上り端に立つて、こう御神前を見ておられるんです。それから御自身で脚立を運んで来られて、おメ縄についている垂紙の一端が風のために捲れあかつていた——それをギチッと折目正しく直されて、又脚立を藏ひに行かれた、終始一言も仰しやらんのです。無言の教化と云いましょうな、島田先生もそれ以来心配りの行届く修行を心かけるようになられましたよ。」

元主「行持緊密と云いましよつな、神さまの御奉仕は
勿論、教務全般、又御教を守る点に於ては實に嚴
正、几帳面を通しておられました。一日四回の御
祈念は欠かさなかつた」

高阪「いくら遅くなつても、御祈念はしつかり丁寧
にせられた。―あの真似は……」

先生「身を持つる事は厳なんですか、他に対しては寛
なところがあるんです。私の教務所の御用の都合
で遅く帰つた時なをば、立場上仕方ないから朝
早くから起してやるな、後（ご）り寝（ね）ませてやらんと御
用に差支えてはいかん」と云つて底（そこ）つて呉れてい
ました」

松沢「私は半年間修行に置いて頂いたんですか、どう
も意気地がなくて二回も病臥しました。親奥様の
御看病を頂いたのですか、無理して起きようとし
ても、親の言う事を聞かなければいかん、と云つ
て勞（いた）つて下さいました。親先生もへゑ道、お前は
昼寝しいや」と屢々仰しやつて下さるんです。し

松沢「御自身でも身体は大切にされました。御神訓を
真正直に守られるんですネ、信者さんの身の事で
も、我身の養生と同じ気持ちで、事こまかに聞き
取つてお取次しておられました」

司「杉野先生、御遠方ならよくこそ御出席下さいま

したな、何かお話を……」

杉野「皆様のお話を一つ／＼首肯づくような気持ちで
伺わせて頂いておりましたな、本当に御親切な温
情益るゝ親様でした。ここに同行の熊崎さんなを
は私にとつては親先生が神様、親先生が有難い、
御本部へはよう参らんか――と云うわけで師を神
さまと頂き切つておられるんですのよ」

司「高阪の先生、どうぞ……」

井上「終戦直後、あれは廿年十二月に亡父の十年祭の
御齋主をお願い致しました、當時は汽車の切符を
買うのが仲々難（むづ）かしい状態で旅行は困難を極めて
いました、御遠方を御足労下さつて真に結構にお
察して頂き父も靈ながらに大いに喜んでくれた事
と感じました。その時の御教話の内で印象深く承
わつたのは鳥刺しのお話で――鳥刺しが長い竿に
とりもちをつけてやつと小鳥を刺すと翼に輪（わ）をつ
けられて慌てゝバタ／＼葉掻く鳥は容易に捕（とら）える
事かできる。利口な鳥はバタ／＼せず凝（じ）つとして
いるから暫らく辛抱している向にとりもちが折れ
易うなつて遂に助かつて行く。という譬喩で、事
ある時に慌てゝ掘（ほ）いては鋸の刃が折れる、落つて
いて、我（わ）を出さず、神さまのおはからいを信じ祈り
時節を待つてお蔭蒙むるという御教えを説いて頂

きました。聴衆は皆、よくわかるようにお話下さって有難いと喜んで下さいました。

高阪「小鳥が好きでした」

先生「長男へ一治さんを一審可愛なつて、教会の後継として囑望して居られたらしい。妙なもので、この子が小鳥が好き、犬、猫が好き——并なように愛する……ハハハハ——」

井上「余程可愛なつたらしい、お茶菓一つでも孫さんにお持ち帰りになりましたからね」

先生「何事にも真心必めてという事が、もう「習い性」となつてしまつたらしい。或時、難波の親先生に美味しいのを召上つて頂くのだというので、鰻を調べて持参されましたが御玄関を這入る時なら早もう嬉しうてたまらんようなニコ／＼顔をされて、叔愈々お目にかけられる段になると、鰻の生立ちなら焼き方、タレの秘訣という風に事こまかに披露されるんです。純真というが眞情というのな、（之はお粗末なもので……）とか（お口に合いますまいか……）とか兄に角せ向並みとは違ふのです」

全「面白い事もありました。役所等から提出期限の定められた書類が来るとお気に懸けて、もう出来たくと請求されるんです。早目に出来た時など早いとこ提出しようとする、まあ待てと云われ

る。結局指定の期限の当日に出させなされるんです。期限以前でもいかにというわけなのです」（一同苦笑）

詞茶天「孫が出来てから、大分変らりました。よう抱いて御機嫌の態でした。お向いの人が私に云やりますねん、何時も眞面目な先生で笑顔なんな見た事おへんが、近頃はえろう。ニコヤカにお笑いやして……」

先生「孫が寝てからでも見て来られて見ただけで済まらずにポン／＼と布団の四隅を叩いて押さえてそれなら之で安心というやうな面持ちで立去られるんです」

川畑「夫婦といふものは、何と云つても、年寄つてからのものやでエ。正子にやう云うといでエ」と仰しやつて下さいました」

詞茶天「母の（帰幽の）時は、後の事は何一つ云われませなんだが、妾としてはそれか心残りで／＼（悲痛な声、聴き手の肺腑にひびく——ソツと眼頭を押える婦人）」

全「父の（帰幽前）時は、万事云い残されました。七十年祭の事も「わしは靈になつて守る、死んでも心配ない」と。兄に角誰でも最期の時にはみんな云い残さんならんもんやと思ひました。あとへ

遠る者の身になつてみますとなあし

高坂「最期の時に帰んで、それが云えるというところに、平素の安心立命、覚悟があつたと思われませんかア」

先生「谷村会長に対して、松蔭会の事を心に懸けて、誰彼の事を一人／＼について申されました。へ決して御心配下さいますな」という会長さんの御返事を聞取られて、スツカリ安心された顔つきになられました」

先生「御神米奉仕しでも、御大祭の前には、いつも一人で奉仕せられるのです。最後にそれをなさつた時「之しさの事で疲れたとは」とフト洩らされたが、段々病気が重うなられて、御国替えの直前二三日の間の事でしたな。病床でお布団の上で手をこうやつで頻りに動みされるんです。はじめは何の事なよくわからなかつたんですな、身は病中でも心は御用に伺いていて夢ウツツの裡でも、御神米奉仕の續りだつたとハツキリわかりました。恐れ入つた事でしたじへ一卒感に打たれ、肅然となる」

詞家「お気の確な向中は、病床の中ならでも、御祈念はキチンとして居やりました」

先生「私はずっと以前のことですか、お結界で時々居

眠りをなさる（ように見える）のが気になかつてならなんですね。それでも参拜した信者さんか御結界へ近つかれると、前もつてパツと目を睡まされるんです。そりや、えらいもんですよ。私も近頃、終日お結界に座らせて頂くんですな、教会は朝は早い、夜は遅い、晝間、或る時間になるとスーッと引込まれるように睡魔に襲われます。不可抗力ですね、あれは。父はそういう肉体的弱点に打ち免つてゆく精神的強さ（真実、至誠）があつたという事を、改めて認識させて貰いました。外見を見ただけで兎や用批判的な気持ちを持ち起すのはいかんこつちやなあと感じましたよ」

詞家「難波の親様からお見舞を頂いた時、お品を凝つと視つめておられましたな、わかつて居られるのか——眼に涙一杯溢めて「親先生によろしく」と云はりましたじへ一同頸垂れる胸迫り眼頭熱くなる」

司「色々承つて叔先生の情に篤く、思ひが深く、そして信心の上御用の上に於ては「一以貫くし眞実さ」という御人格を識らせて頂きました、今更に、襟を正し頭が下なる想いが致すのでございます。名残りは尽きませんが、夜も更けましてお疲れでもありましょう。この辺で教会させて頂きま

しよう。どうも有難うございました。（文責任——大森）

第三回 先代親先生を偲びて

33・8・6 即ち全国大会参拜の翌日、相会するもの十二名
紺碧の大空に白雲去来し、翠巒、眼に爽やかに、湖上を渡るか
涼風吹き入る新館二階に於て開かれた。

司会「皆様、よくこそ御参集下さいました。故親先生
を偲ぶ会が既に二回重ねられました。色々結構
なお話を承りへ私は私なりに纏めてみますのに
親先生は真に情が厚く思い遣りか深く、親切な心
が満ち／＼しお優しく温かく和やかで皆人がお慕
い申上げるお人柄、そうかと云うと反面には秋霜
の如く、烈日の如く、厳しく固い几帳面さ、実意
さがあつて、この二つがうまく調和していて、一
言一行みな節に当る。そこで禽獣自在に人が助け
られ、育てられてゆく——この点を私は敬服もし
真似させて頂きたいと思つたのでございます。兎角
人間の智、情、意の効きは、偏し易く、調子を外
して失敗し易いものであります。親先生に於か
せられては、それが偏よる事なき円満な御人格な
のです。どうしてそういう風にお成りになった
ものかへ多年の御修行による事でもありましよう

か。そのこの趣をどうかわからせて頂きたいと思ひ
ます。今回の会は、研究的にと申しては語弊があ
りましようか。その由つて来るところをお教え頂
ければ有難いことと存じます。どうぞ宣教お願ひ
致します。

高阪「司会さんの申されるように、今は智識に偏より
過ぎる傾向があります。教祖様は神徳学徳が大切
と仰せられましたように「智しに偏していますと
まさかの時にぐらつきます。」「心構えし——信念
身の徳」が要ります。それがさあ——という時に偏
値を現わして参ります。

先刻承つて感心したのですが、岡の熊谷真治さ
んの御国替えの御様子ですか。死期を覚つておれ
ず悩まずお世話になつた方々に一人も漏らさず御
礼を述べられ、療友悉くに別れを告げ、親、弟妹
信者さん達に感謝し何等の不安も動搖もなく、大

安心の裡におかげを喜びつつ、逝かれた——正に大往生です。事の表面しな見得ない浅い批評をするものは、ようおかげを頂かなつたなどと云うかも知れませんが、尋求教語録の中に死んでおかげのこともあり、いのちを助けて貰つておかげのこともあるしとあります通りに、眞治さんは肉体は死なれても、精神は生き切つて往かれたのです。それと申すのが療病六年間の精神修行の上に、おかげに描えを頂かれたのだと思いますし。

松本

「もう娼終の直前まで大元気で大きな声で皆さんにお別れを告げ下り何やかお話をして人さまを笑わせておりました、喋舌り疲れて一休みするのだナと思つた——ホニー寸の隙に、一つフーンと大きく呼吸をしたと思つたら、それが最後でした。悶えるの苦しむのということは全然なかつたんです。まるでうそのような楽なお引取りを頂いてし

大森「本年正月に私方へ頂いた賀状に

「癒えもせず、生きるほかななく、六年目に静観と太く書物を吊るしとありましたね、焦躁も不満もない——全く神の御懷ろに抱かれていられる心境に在られたのでしようね」

金光教——死に娼んでも云うべき事は——喜んで有難く——死なさして貰うの——御神米と口の中へ

入れて——呑み込んで——すぐ目をつむつて三分間たゝぬ内に——

高阪「心構えしは一朝一夕では出来ません。義務教育だけでも相当の年月かかひるものですな、心構えは長い歳月の不断の精進から生れてくるものですそれは教師としては御結界奉仕の恪勤から、信者としては日参の励行から、いつとはなしに身に頂くものです。絞よつてくるとそうなるし

高阪「故先生は、御結界奉仕恪勤を四十余年間一日の

怠りもなく貫き徹された、そこから心構え——神徳を頂かれたものです。教主金光様のあの御結界御奉仕、御恪勤を拜しますとき、理窟を超え、智識に偏せず神なかななる生命の顕現と言おうか、貴い御徳の本源はこれだ——と感ぜずには居られません。

道は近きに在ります。お互いの日々に仕えさせている御結界奉仕恪勤の中に無限の宝庫があるわけなんです。尤も「形」の上だけではなりません御取次の御精神に神習わせて頂いて、倦まず疲まず繰返しく、恪勤しておれば必ず道は開けるのです。

先代が若年の時、自由に進路を扱べと云われて「私はお道に就かせて頂きたい」と申された、そ

のお心構えは、初代がお道につかれてなら、一途に御取次ぎ御用に向う心であられた——そこなら何となく授かつておられたのだと思います。そういう親の徳を頂いて居られた上に御自身の四十余年の格勤を御修行の総和があの玲瓏、円満な人格に玉成されたものでしょう。どうも氣永く三代主表で漸進的にゆかぬは完うでさんですね。(1)正しく受け、(2)正しく守つて、(3)正しく伝える——この順序、段階が大切ですよ。そうと知つて受けるのと知らずに受けるのは大変に違います。會員としては「自覚して受ける事」が大事です。

岸野

「手続尊重」という事の意義は承知してゐる積りですけれど、親先生を頂く上に於て、どうしても隨いてゆけぬ、と云うか、受け切れぬ、と云うか納得の出来ない事々あるのです。実は私方で初代の式年祭を営むについて親先生に御齋主をと、御結界で御願ひ致した事々ありました。その時意外にも「お身体のお加減なお悪いようでもなかつたのに」若先生を遣ると仰しやるんです。さあお心持ちなわからん、しかもですね、その翌々日に篠原教会へは御自身お越しになつたと聞いたんです。何故、篠原へは行かれて草津へは来て下さらぬのか？。親様と慕ひ、敬えばこそ又大切な式年祭ゆ

えに、わざく、お願いにあつたのですのにな……高阪「私は、事に當つて専ら受け方、受け心を調べてゆくのか、自分としての信心の大切な問題だと思ふております。例えば私の場合でも親戚関係でありますだけに特に「受取つて、動く我が心の姿」を調べくして、我を見つけ我を去る事に努めるようにしております。それなら、親先生は即ち生神様、金光様御手代として拜んでゆく事々肝心ですな、その反面、人間として見てゆく事も必要なのぢやないでしょうか。矛盾するやうに聞えるかも知れませんが、肉体人間であるからには年令や健康不健康やその他いろいろの場合その立場になつてみて考えさせて頂くならあの御結界格勤の一事に親先生の神姿を拜み頂くべきだと思ひます。實際あの事は敬服の外ありませんからね。それにお互いに公平無差別を旨として信者さんに接して居るわけですか「信心の進修」を常に心に懸けて居るせいか「判つた人、出来て居る人」に対してつゝい力を入つてしまふ傾向がありますね。そうでない人に対しては、今やかましく云つてもいけないから氣永く構えて徐々に、漸進的にと、緩りと肉花を得つような氣分で接する。それを外的印象からすれば差別扱いしてゐるやうにも見えるかも知れ

ませんか。此方の心中に差別意識は無く、対等の根に依じて自ら緩急強弱が生じて来るのです。

物によって差別するなどいう事は論外として、好悪による事もなく信心の段階によつて自然と扱ひが違つてくる事は止むを得んと思ひます。自分の心を知つて貰ふ事は難かしいものです。先年団体参拜の車中で頂戴もののお菓子へ無怒の氣持ちから手当り次第に誰彼なしに配つて歩いた事があった。それな問題になつた、不公平とか云うのでしよう。全員に一個づつという程の量はなし、各座席に一つづつというわけにもいならず、半渡し易い方にあげたというだけの事でしたかね。それに磨りて今日では余り配つたりしません。岸野「其後、子供の病氣の時、親心の切なさ、わがやせやうと思つてもわからせる事の出来ぬ辛さ、等を体験いたしました。それによつて親先生のお心の幾分が分らせて頂いたやうな氣がして、改めて参拜した時など親面に親先生の御機嫌が麗しくて、慈父に接するやうな氣持ちになられました。

高阪「善い受け方が出来る、チヤンとその通りに響くのです。

岸野「悩みに悩んだ末に、大分親心の深さを悟らせて

頂く事が出ますと、その向御不沢、御心配を捧げて相済まぬ事であつたと、慚愧の念が強く湧き起るままに早速参拜して、御結界にひれ伏して衷心からお詫び申し上げました。そして常と受えて御祈念の時刻でないのに御祈念帳を持つて御内陣に飛込むやうにお這入りになつて、永い御祈念をお仕えになり、後座されましたお顔を見ますと、お眼は赤く且つ潤ほつてたり頬にお涙の跡らしきものを認め、私も思わず、うつ伏して感動に身を慄わしました。

高阪「そこだ。そこに生神金光大神がお現れになつたのです。岸野先生の在り方に依じて神さまはそのやうに現われなさるおかげは我々心にあるものです。

先主「改先生は、こちらを觀察せられてへよくやつてゐるわい、と思われても一言も口へ出して仰しやらぬ、併し求めて往くと、充分行届いてお教え下さるのですかね。当人に対して口で教えられずに自ら求め、悟つて、わかつて呉れるのを待つ、とても云う風でしような、始終心を神の方へ向け、信心向上を祈つていて下さつたやうです。ですから、わかつて呉れたと思つと、無性に嬉しくなるのでしようね、泣く程嬉しく……。

先生「先代帰幽後、親教会へ御引寄せ蒙つた時、親奥様から私にこう仰しやつて頂いたんです。「大津は出社も多し、苦勞も多し事だらうな」云いなはんなや」云う心で祈るのなよろしいのですよ。あんたやつたら大津の跡目は読渡やらせて貰えますそのわけを云うてあげましょう。今やなら打明けて云いますな……」と前置きして云うて下さつた事は――

実はネ私（先生）が始めて親教会の御大衆に参らせて頂いた時の事です。私にも何か御手伝いをお命じ下さいとお願ひ申上げた。新へ割木へ割りをして下さいという仰せなんです。ハイと答えて一心に割っていた。お衆りの始まる商除（はさわ）までやっていたんです。その様子をジツと眼をつけて居たと仰しやるんです。たゞこれだけの事なんです。私は驚られてることなんか全然氣も注がなし、与えられた御用を真剣にやつたというだけなんですなね。

大森「割木を割れと仰しやる御心の中に、へ人によつては不平を云つたり、膨れたり、腹を立てたり、嫌々やつたりするかも知れん場面ですから」大きな期待と善意があるのですね。そうすると、言葉や態度にひつひかつて居ては、大切なものへ善意

を受け損うわけだから、言葉や態度の背後にあるものを心眼を開いて確り認識し把握せねばならん事になりますね。先刻の岸野先生の肉題にしても、親先生の御心持ちとしては、自分が行くよりは若先生を遣つた方が一層善なるうへ若い者同志の方かならう、とか將來の事を慮つて、とか」といふ善意から発した事ではないでしょうか。藤原の方は年令や古い関係や、などから云つて御自身が行かれた方が適當だ、と思われたのではないのでしょうか。――これは私の想像に過ぎませんが……。兎に角御自身の都合を元としてお考えになるのではなくて、相手の立場を生かすようにとの心遣いと感ずるのです。根本は、決して悪意に出るのではなく、善意からだと解れば問題は無いのではありませんか。

高阪「津の山川トク先生の時代に、教徒の〇〇さんかコリを積んで参らんようになられた原因は、〇〇さんの子供さんが死なれて、その葬儀を頼みに行かれたら、へどういふ事情があつたためか」よう行かれなかつた――それに憤激しての事だつたさうですが、一応無理もないと思ひますか、反面、御婦人の先生の事ですから、身体的にも事情の上にも御察してコリを積まずに道をつけて行けな

つたもののぬ、と消しく思います。

大森「コリを積むのは、相手を批判的に観て責める心と自分の不満、腹立ちの念ひとを、繰返し繰返しお復習している内に、牢固として抜き難い念の累積の力が出来て、その結果感情的に暴走して、了うことになるのではようね。或る教徒の人の集會の都度、某氏が二階から放棄したという事を話に持出されるんです。それな今から二十年も昔の事なんですかね、よくも長い間忘れずにいて、又それを知る人にも一々伝えるんですかその心と口との切さを悪（欠点）でなく善（長所）の方へ向け、繰返し繰返し、人の美点を称揚し、おなげを二十年経つても忘れずに居るといふような心構えならば、素晴らしいおなげを蒙ることでしょうにねえ。

先生「藤原の五十年祭に、親先生が御斎主を仕えられ祝詞奏上中、絶句され、声も杜切れ勝ちに辛うじて奏上を終られたという事についてですネ。

岸野「所謂、万感胸に迫るで、道が拓け、流さ、栄えてゆく喜びの念ひが昂揚してきて、もう抑え切れんようになられたのと違いますか？」

先生「先月十二日の靈祭に、奥山先生は、御帰幽を予感しておったというふうなお話でしたか、……」

橋本「お結界奉仕格勤は本教の生命的な事とよく承知

しているのですかこれを實際にやつていると一寸都合の悪い事が起つてくるんです。うちうでは信者が不足を云う——先生は堅過ざる、親先生は、お火鉢で親しくお話をして下さつたものだ、敦賀は敦賀流にやつとくなされ——と」

このデレンマの悩みを親先生に話しましたら、信者が参つて来ん時にはお結界を勤めよ、信者が参つて来たらお火鉢へ下かれよ、と申されました。高取「誰も参つて来ん時に、嚴然と御結界に奉仕して御取次させて頂くという事は結構ですなア、そこが大事な事だと思わせて頂きます。

律宗の公衆みたいなもので、雙手の声を聞け、とぬ、一寸理窟では解けぬ問題を与えられて、結跏趺坐して練りに練っている間にわからせられる——吾々はお結界格勤を倦まず撓まず、させて貰うておる間に、段々わからせられる、へ頭脳習でなく、自力を起えて——先代の先生はそれを事実なやつたのです。先代は堅過ざるとか愛想が少いとかよく云われなかつたが併し一番肝心な事を貫き徹されたんです。

川畑「御礼信行会の行事でも、御本部通達の通り寸分違わず厳重に履行されるのには恐れ入りますわ、

(教師は御結界常侍)と云えば宅寮にもお趣しにならしまへん。

川畑「母上(初代夫人)御帰幽の時でも、冥の暗いお部屋(殯室か)で夜通し座っておられました。お通夜というても、世間では大抵一寸一休みしますのになあー又、いつもお祭が済んだら、跡片附けをしまわぬと休まれしまへん。」

夫人「それら、融通が利かんこと夥だしいのです。母が生前よく話して居りました。あれで商売人やつたら(堅過ぎる、虚言をようつなぬ、融通が利かんの)で損ばかりしてはるやろ、逆もウダツがあかれへんやろ、併しお道の御用に使うて頂いたので、堅過ぎるのな却つてよかつたのや」と云つてし。

世古「私は言つて大津親先生から、神様に喜んで貰うような信心をせよ、それには親先生に喜んで貰うような信心をすればよいと、御教えを頂いたんです。後日松太郎様が入院をなさった時に、布団運びをしたのですか、それを先生がいかに満足気に、ニツコリ笑って下さった——その瞬間に、先般の大津の御教えはこれだなと直感しました、理窟抜きにです。」

先達て私の宅でお宿をさせて頂いた折りに「神

御衣前しと御揮毫して頂き御神床の壁面に掲げております。自分が建てた俺の家ぢやと思ひ易い慢心を戒しめて下さり、且つ又、我が物とては一物もなし、皆神の物しという信念を持たせて頂ければ前途愈々洋々としているような、心強い感も湧き起つて、朝夕に有難く拜させて貰うておりますじ。

川畑「我が身をば忘れて登る奴風、糸目の切れる事も忘れて、のお歌を以てよく慢心、油断、忘恩を誡めよと教えて頂きましたじ。」

高阪「反省心も強かつたなア、第二回御奉仕神習会から戻られた時に、或る先生が一層御神徳を頂かれまして云々、と御挨拶されたら、いや、鍍金を利して貰うて来た。と答えられたじ。」

ヤ村「私は済まんことですから遅刻して参りまして……今迄にどんなよいお話があつたのな、知らせて頂きたいのですか。」

高阪「司会の希望で、前二回の会では、こういう事であつた、という話が出、今日の会では、どうしてそうなつたか、に重点を置く事になつて、先代のあのお徳の由つて来るところは御結界奉仕格動にあり、という話になり次に或る教会へは自身が行なれ、或る教会へは代理を何けられる事に關する疑義が出たのですか……(雑音のためあと聞え

す。先手、教師と役員、講習会を催されまして、その席上で某信徒代表の発言に、

1. 先生のお結界啓動 2. 信者の日参励行

3. 深切な教導 4. 直会席の在り方

5. 役員の決定

と五ヶ條を挙げて居られましたか、正にその通りの同感の地ありませんでした。教会振興拡充強化の要諦を言い表わしておると思えます。

司会「閉会の御挨拶を申し上げます。斯様に打ちとけた、和やかな雰囲気の中に、故先生を偲んで、段々と結構なお話を頂きます内に、はみらずも一番肝心な道の本を闡明して頂き、話をに入れて貰ったような思いでございます。御結界啓動が人体に於

若き日の親先生

故親先生には私の小學校時代、数年間先生のお側で起居させて頂いた時から、昨年十月二十六日伊勢教会の記念大祭にお引寄せ頂いた私と家内は、奇主として御仕えになった先生の御伴をして翌日参宮させて頂いた時宇治橋で先生を囲んで記念写真に入れて頂いたか、その僅か二ヶ月後に先生を御見送り申し上げるまで実に

ける骨髓のような幼さを爲して、一言一行真の信心と展肉しお徳を蒙らせて頂く道に通ずる事を確信させて頂き有難う存じます。お手統きを大切に御取次を仰ぎ、神の敎智を頂いて、我を無くして神意の仕々、御引廻わしを頂きたいものであります。今もあちらで今日のような有意義な集いを毎月のようにでも催して欲しい、という動議がなされております。それ程感銘深い結構な、親先生を恩会でございます。諸先生方、厚く御礼を申し上げます。これを以て散会させて頂きます。

(文責在大森)



菅 原 幸

五十数年の久しきに亘って格別なる御愛顧を蒙ったのであった。とりわけ私共夫婦は先生御夫妻に仲人までして頂いたのが三十余年前私共が郷里を離れて阪神地方へ参つてから後も子供達を連れて大津へ帰る度ごとにいつも変らぬ温容とおいつくしみ下さったのであった。二代清影大入先生の御高德については他にこれを

語る方々がきくゝあることであるし、私は云わば多年わさ道で勝手させて頂いて居つたので、ここには故先生が御結婚になるまで改造される以前の事務所に於いてまだ部屋住として御修行なさつていた頃の追憶の二三を心に浮かぶまま述べて置くが、これはどこまでも一少年の眼に映じた若き日の先生のホンの一側面に過ぎないことは断わるまでもなく御了承願える事と思う

先生は小島が非常にお好きであつた。その時分長等山でよい小島を追ひ／＼して居られるうちにいつの間に石山へ出てしまわれたことかあつたそうだが、當時の事務所には中学生の高阪正太郎兄と小学生であつた私がお世話になつていた他に、もちろん次々と修行生が来ていた。私共が先生について小島とりに行つたのは小肉^{ニク}墓地の現在養老院になつてゐるあたりで、そこは一面の採^採林で中程に美しい山水が湧き出る泉があつて、小島たちの寄り場で私共には絶好の「スイパレ」(獲物の多い縄張り)であつた。泉のそばに^池を置き、うち竿を何本もしなけておいて遠く離れた木陰にしゃがんでそれを見張りつゝ幾時向でも小島の来るのを待つていたのもなつかしい思い出である。飼つたのは主として目白、うぐいす、等の和鳥であつたが、うぐいすに早鳴きさせる爲に小さなランプで灯を入れることなどはいうまでもなく、餌も混合飼料等賣つて来るの

ではなく、琵琶湖で釣つて来たジャコを焼つてそれをすり鉢で粉にし、同じく焼つた糠とまぜて作るのであるが私共に手伝わせて、先生自ら総てなさつたのである。

先生は甘いものが大好物であつた。大黒屋のワッフル、最中、飛騨屋のすごもり等よく買ひにやらされたが申すまでもなく御自分だけでなしに食べ盛りの我々に対する御配慮がこもつていたのである。それに関連して忘れなたいのは、年末の内松取りである。その頃御信者で滋賀村長をして居られた若代久太郎氏の御宅へ出向いてその所有の藪から先生が適当な竹を見立てられそれを切つて持つて帰るのである。旧九聯隊の兵営前を通つて行くのであるがその近くに街道茶屋の様な饅頭屋があつた。その饅頭屋のうまいので必ずそれを買い込んで行つて藪に入る前に琵琶湖の見はらせる小高い所へ腰を下して先づそれをほうばるのである。切つた二本の竹は長いまま私共が前渡を担ぎ、更に松や熊笹も切つて皆が分け持ち、先生の後からなりの道のりを教会まで帰るのである。戻るとすぐに先生が器用に竹を切つたり、棕櫚縄で男結びにしたりして立派な内松に仕上げられるのである。

食物の話ばかりになつて気がひけるが、その時代の修行生活を御存じの向は必ずしもおとめにはなるま

い。夜分もおそくなると若い者は空腹を感じて来て、何かをほしくなる。それを察して先生から大黒座の前の「常盤」へ行つてこいと云うひそかな命令が出ればしめたものである。私共は小躍りして飛んで行つた。所がなにしろねむたい盛の年頃でもある。先にやすませて頂いていると、うどんを取り寄せられた先生が「起きんか」と起こして下さるのだが、こちらは寝入はなでムニヤムニヤと返事をするだけで一向に眼をささない。翌朝うどんのから鉢があるのをみて折角の御馳走を逃した残念さでうらめしげにその鉢を見つめた事もあつた。

ある年の秋、松茸を沢山食べすぎてひどい腹痛を起し、事務所の寢床で苦しんでいると二代の先生がこうれてお腰に手を当てて見られ「これはひどくつかえていゝる、こんなに食べすぎてはあかん」とおっしゃつて静

日々のおすがた

かにさすつて下さつた。二代先生が立ち去られた後で下痢を催して来たので立ち上つたが便所までもちされか尾籠な事ながら畳の上でしくじつてしまった。そこへ故先生が飛んで来て下さつていやな顔もなされずすつかりされいにして頂いたことは私の頭から生涯消える時はないのである。

浪花金光学園は教内各位のお祈り添えによつて順調に発展の道をたどらせて頂き居り、新校舎建築工事も着々進捗して来る十月三日には上様式の運びのおかげを頂いている。頑健とは云えない私がこの様な大争な御用に當らせて頂いている事を先生はどんなにかおよこび下さつていゝることかと思ふ。それ／＼に先生の御命名を頂いた三人の汗はすでに學業を終え社会人として活動させて頂いている。先生の御取次と御慈愛に対して改めて御礼申上げる次第である。(三三九、二六)

川畑 勝次郎

御恩師には

初代二代両大无主の御厳格なる御教導の許に御肉親をお教れになつて御修行をせられ三代目として「金光様」三代一日の祈りしそのまゝの御取次の御用にお仕えになりました。故親先生、その親先生お在せし日々の御有様を誅び奉らして頂きますと、

①常に御取次の御用を一心に思ひになつておられましてので御煙終の極み迄御神米々と申されまして御召のおふとんの襟をおつかみになつて御神米をお折になる手付きをなされた。

② 常に辰朝、昼、夕、夜と御祈念もせられた。殊に
昼、夕には時折信者のお届のためや又当社、先生
の参拜にてそれへにお話がありて御食事時より
二時間もおくれてもその時の御祈念をすまされけ
れば食事はおつたに頂かれなかつた。

③ 御届の来るとくに丁寧にお面さになり、病人の御
届の時はその容態を細に入り微に至る迄聞かれて
御祈念をせられた。

④ 何時も温情あふるう様に御教をせられたが時た
ま事によつてさびしく信者をお誡めの時もあつた
御届の事項等は何時も簡書で丁寧に書かれた。

⑤ 月次の御掃除の時、又は御供の時の三宅其他の御
神具は間隔をさうつとはなつておられ、御神殿の
中へは羽織と袴を着用せなければお入りにならな
かつた。

⑥ 春秋大祭並美祭の御掃除又は衛生掃除でも皆御
神殿は羽織と袴を着用してせられた。

⑦ 御家庭に入られてもめつたに羽織袴はお脱ぎにな
らず外出よりおなえりになつてもすぐ常着におき
なえの上羽織と袴は着用せられて何時でも御祈念
の出来る様に待機しておられた。

⑧ 祝詞、祭詞もよくおわかりになつても幾度も読返
しておられ、殊に大祭の祝詞は大寺にして大祭の

朝でもひまあれば熟読しておられ出社の記念祭、
年祭等には必ず出発前にもう一度お目を通してお
られた大祭の祝詞は書と二なうと御機嫌が悪なつ
た、祝詞祭詞の清書の字の上手下手をめつたに言
われないが、神様に申上るのであるなら正しく書
く様にとお誡しめになつた。

⑨ 眞素を旨とせられた一例としては或る時出社の記
念祭に一拍で行かれる時、親舅様が女心として、
親先生の長じばんがフクリン（本モス）の事なの
で絹の長じばんをおこしらへになつてはと申され
ましたうフクリンで本モスの事によいこれでま
にあえばよい絹の長じばんをかうなればそれだけ
を御本部へ御用立として頂くと、申された。

⑩ 五十年記念祭の時、御直会もすみ、近藤明道大先
生も無事に帰還せられ一と安心せられおつたの
様子が見え夜も十二時になりお休みかと思いまし
たら御祭も無事に盛大に仕えさして頂いたのだお
前もつたれたやううが、神様の前をみたづけさし
て頂こう（常の様）と申され跡片付けもせられ
改めて御礼の御祈念をせられた恒例の大祭の時ど
んなおつたれでも直会かすみ御礼の御祈念をせ
られその日の御献酬を奉つた方の名前を一日奏上
され又霊神様にも大神様同様に御礼申上され一々

名前を報告された。

以上、親先生の日々の御有様の概略を述べさして頂き御高徳を仰ぎ度存じます。尚、親先生の修行感とお若い時の事の一部を述べさして頂きます。私が修行をさして頂いて一ヶ年程たつてからのある日でした。お前は映画も遊びにも行き度いと思わないのでよいが、ア、ネムタイのやつらしいな、ア、ネムタイのを辛捧するの、修行である然しな、ア、つらいから修行へもつていくのでは、ほんとの修行でない、つらい事を忘れ有難いと思うて、寝不足の修行をさして頂けばよい、どんな苦行難行をしても自分の口から余り人に云いなやア、人によつて自分はこれだけ修行をしたと云う人が有る、聞いた者は感心するが、それでほめられるから、徳が滋い神様に知られたらよい、わしも若い時にはよく修行をした、肉の松沢はん（牧四太郎先生）と早起の修行や寒中夜水を汲んでそれに氷がはつたのを手でたいて氷を破つて二人でその氷で「ローカ」のふき掃除や其の他の修行も種々した、何人にもめつたに云はない人と云わず辛捧してある裡に神様に知つて頂き、徳がうけつけられると教へ給へり。お若い時の事（牧今堀ちか大刀目の談）

二代先主御病身の時代つて御本部へ参拜せられる（御部屋住の時代）帰える時手帳に使われた金高と丁重

に記入しておられるので参拜した信者一同がその様に几帳面におつけにならないうでも不足を生じたと思ひましたら私等がおなげを頂きますからと申しましたら金子の多い少ないとやなくと書いたりするのではない、出立の時先生が（二代様）御神前よりお下げになつたのを頂いたのであるからこれだけ使わして頂きどれだけ残つたとさつちりとして先生に申上げねばならぬ、先生がその高い事を神様にその様に御届けをして下さいますから神様のお下りを無駄に使うて御無礼になりますから手帳につけてさして頂いておりますと申されまして、たので一同思わす頭をさげしばらく頭をあげる者になつたと吉備の家でお話を云うて下さいました。あとで参拜の者がきつと御玄前の御用へ三代教会長としてしをして下されるに違ひないと御高徳を感じたと付けておさかせ下さいました。

一同拍手



冬の曉の憶ひ出

文

森

繁

未明に蹶起、内を肉いて凍てた路上に佇ち、満天の星光を拜し、肌刺す寒気に身の震るを覚えつゝ遙かに教主様の御神勸の光景を脳裡に描いて拜し奉り、更に湖国大津の親先生の御格勤ぶりに想ひを馳せる——こういう時、私には忘れられぬ懐かしい憶ひ出が今も尚鮮やかに蘇つてきて心温まる思ひがするのです。

なつて、親教会月参りは欠かしたくなし——併し身辺で多忙で予定が立たぬという状況のとき、不得止午後四時半津発——七時頃大津着、参拜してゆつくり御祈念も出来、親先生ならこま／＼と御懇篤な御教導を頂いて、お蔭を蒙った事が三度あつた。時刻移つて、扱宿泊の段です——親許へ参らせて貰つて居りながら旅館へと云い出すのも、私としてはそ／＼しいやうな氣もして具合が悪いし、最初からお教会で泊めて貰う予定で参りましたというのも我れ／＼厚顔しくて一寸具合が悪い。備忘な性分で親しみの足らぬ自分と自覚してゐるから、ままよ、厚顔しいかお世話になつて甘えさせて頂こう、と社を定めて泊めて頂く事にしたか、それでも成可く御迷惑を掛けまいという心から

「明朝は、六時発の汽車に乘るため、御祈念中にそつと出立させて頂きますから、どうな何もお構ひ下さいませぬように……」と奥へおことわりしておいて床を敷くために旧の事務所の二階へ昇つたところ、意外や其処には既にちやんと床をとつて頂いてあり、おまけにお炬燵まで入れて下さつてあつて、手を入れてみると丁度木コ／＼と適温を保っている。思わすホーッと一息、旅先きの飯屋のギコチない気持ちちは雲散してしまつて、まるで我家に居るような落ちついたゆつたりした氣分に浸ると同時に、思えばとるにも足らぬ一介の修行中の自分に対してもなくも親切丁寧なお心配り——親心とは之か?、「あつ勿体ない、有難うございます」と思わず其の場に手を突き頭を下げて御褒所と思しさうへ向つて御礼を申し上げた事であつた。こうして身も暖かく心も温められて、ぐつすり快眠させて頂いたためか、四時には目醒め暗中で静座などしているうち、五時ともなれば早カラコロ／＼と御参りらしい足音、つづいてギーと潜り内を肉く音、二人三人「お早ようさんでござります、よう冷えます事で……」

ようお詣りやす」と挨拶の言葉が聞える。御老人らしいかえらなあと、思いつつ、自分も臥床にお礼申して大広前へ出ると、早二三十人の参拜者が勢を揃えてお掃除の真最中である。

お結界の前あたりに座をふめて御礼になうると向もなく親先生の御出仕―これはよい都合と改めて御礼を申し上げ一層の御祈禱をお願ひし、お暇の御挨拶を終ると、御機嫌麗わしく御聴済みの後「一寸待ちなはれや」とお言葉と共に急ぎ足にお奥へ戻られる様子。ハテ何の御用かしらうかと思つた瞬間、別に御用のある筈はなし。何か御配慮下さるのではあるまいか―若しそうとすれば断然御遠慮申し上げねば相済まぬかと少し遅れたかお跡を慕つてお台所直ぐまで進むと、「お誠、お誠？」津の大森さんが今から帰らるゝ六時の汽車やそうや、早うお弁当持ててあげてんか、暇があつたら悪いお茶でもあげてなアレというお声。

（ハッとした―）何んという行届ぬぬ私である事か―自分で自分の嫌になつた―昨夜おことわりしていただいたのだが親先生までは届いていなかったのか？親真様は御承知下さつてゐる筈であるから、そんなお心積りはない筈、そうとすればいかに親先生の仰せとは云え、突然のお弁当持ては飛んだ番狂わせであらう。最寒の早朝、早起きだけでもお年を召してはおえらな

らうに、短い時間を気にされなから、乗車時刻に遅れぬようにと気を揉んで頂いては本当に申訳がない事と身の置き場に困る思いがオロ／＼と御辞退申し上げたのであるが、親先生は事も無げに「なアに、直ぐに出来るし、朝の事やさかい別に御馳走もないか有合せの物で辛抱しといてや、寒い時にお腹すましてると、いかにさかいになア」と仰しやつて気忙しげに既に御祈念の定刻が切迫してゐて多勢参拜者が待つて居る大広前へ速足で急がれた。

之が感激せず居られようかこの場合にこれ程の温情、これほどの実意、これを忘れるようでは俺も駄目だぞと自分が自分に云い聞かせつつ此の朝の勿体ないお弁当の空箱とお箸とを、いわれ書きを添えて永く保存する事にしたのであつた。

「伊勢は津で保つし」と云われるくらい肝心な御土地やならどうせしつなりやつて大御蔭を受けてやれと参拜の都度にも御直会の席でもよく仰しやつた。再三再四のお言葉だから、余程深く思ひを籠め、祈を凝らして居て下さつたのに違ひない、然るに不徳極りない肩子己れは、御生前中何一つ御心を安んじ奉る事な出来なかつたのみな、逆に御心配のかけ通しで漸死したいほどである。新築落成祝祭に津へお越し下された時の記念写真に御風貌を偲び、いろいろ

の懐い出に耽ると、今更のように「しつかりやつてや」の御声かこの愚悪鈍根の我れを励まし慰さの、

叱
ら
れ
て

いつもニコ／＼と微笑を湛えられて、慈愛の眼差し温かく温和、寛容、重厚のお人柄を懐かしむ親先生ではあつたか他の反面、事と事に依つては秋霜烈日の峻厳さをも併せ持つて居られた事を慮じられたお方は少いだろうと思ふへそんな機会に遣われた方は無からうから……私は親様の大愛に包容されるの余り、親しきに押れて「義しを輕んずる弊に陥りあの春風駘蕩の親先生から、叱られて、冷汗三度の思ひをした事がある。

布教当初の事、藤という求信者があつた。長男（十四才）が酷い癩病で悩み抜き、一流大病院で脳の手術をして貰ひ、之で病根一掃と喜び勇んで帰宅してから、一ヶ月経たぬ間に又せろ再発して昼夜の別なく頻々と発作が起り、酷い時には一夜中に十回も起つて奇声を挙げて叫び、何事かと怪んで近隣の人か夜半に戸外へ飛出すという有様、孫可憐い一念から祖母がお連れに來て尔来本人も参拜するようになった。如何にして

見守つて下さる親の情として、心裏に響いてくるのである。嗚呼、

大
森

繁

お蔭を受けるべきか——斯様に肉体上の原因は除かれたのに不効、病氣は故本塞源的に根治せず、却つて一層悪化したのであるから、肉体のみに手当を加えても駄目だ、悪形の病因（竹内博士の所謂幽因）の押込が肝心だという方針の下に、不徳下ら最善をつくしつづ且つ親教会へ御願届けをした。斯くて、御取次の御蔭の有難さ、この難儀な氏子を救われて、やなて、あれ程頻繁に起つた発作が段々に減り遂には全然跡を絶つてしまつた。全治したのだ。

併し、家人にしてみると、大病院で名だたる名医が最善最新の治療法をつくし莫大な費用をかけたのに不効治らないほどの難症が、たゞ三ヶ月程参拜したというだけで、打ち込んだ信心というのでもなく気休め程度の参詣で以て易々と全治の大靈驗を受けたとは信じられないらしく、発作は絶無、又月日経つても再発せぬという現実を認めて居りながら、心の内では（多分）一時はおさまつたものの、どうせ又々再発するだろう

……ぐらゐに思つてゐるゝして半信半疑、一向に喜ぶ色が見えない。従つて感謝の心を出ない様子である。親教会へ御礼参拜同道を幾度誘つても、何だかんだと断わりばかり云う。心無きものには致し方もない。なり代つて御礼届けをさせて頂いた。自分としては斯くも頭着なる神威を仰ぎ畏み、又己れの教導の行届ぬ事を慚愧した事であつた。

——さて、話はこれからである——

其後、時経て、この藤さんが再びお籠りに来たのは妻女の肺患が医療の功も渺々しくなく一向よい目を見ないという悩みからであつた。一度だけ参拜されたが見れば病人は、氣息奄奄、嚙舌で云う言葉も商取りにくい。痼疾風にも堪えぬ風情で、早く云えば影が茲い感じである。併しお籠りして来た上は、お蔭を頂かねばならぬ。他に同じような状態なら、美事全快のお蔭を蒙つた人の実例も二三に止まらないうら、一心の信心を勧め且つ勧めし、又苟も人の命に肉わる事であるから、慎重を期して親先生にお取次ぎを頼つた——まことに無理なお頼いを申上げた次第である。そこで親主は日参りは勿論、一家勢信心して、真一心にお籠りすればよいに毎日往診してくれる医師の言は神命の如くに推れ服従するが、信心の方は産張り熱が入らぬ、体温表を眺めては一喜一憂をくりかえし、衰え切つた

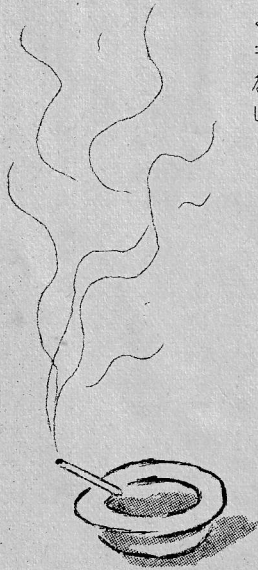
胃腸に、栄養食を摂らせうと腐心し「お注射しを救いの綱と信じ頼つてゐる始末で、心は病氣に向ひ切り、信心してゐるといつても教えは聞かず初りは出来ず初れ棄れし御理解を囁んで含めるように詳細に説き面会しても我田引水の言としを受取れないらしい。正に、棄れ初れにするからおかげにならぬ。」との御理解そのまゝの状態であるから、こちらは気がでない、成り代つての御祈念に励むより致し方がない。こうなると当方は実に苦しい、親先生は実意丁寧なお方であるから、真剣にお祈り下されてある事はわかる。然るに、お蔭を受ける頼主の方は余り神様に頼つておつないへ時々お参りはするが……中間に立つ自分是不徳者……どうも助なりそうに思えぬ、お蔭を落しては神様に対し、親先生に対しお道に対し申訳が無い事になるから、焦慮一方でない。「忙しくて教会へ参拜もでき兼ねまして」と弁解ばかりしてゐる頼主を頼頼して、真剣にお籠りすべくよく諭し、親教会へ同道参拜をも勧めたが差支えがあると云、暇なつくれぬ、とか云つて仲々都合が一致しない。果ては「それでは手拭を以てお頼いなりお礼なり致します」という事になつたのでこれも止むを得ぬ事としておいた。こうして結局のところ、病人は一進一退を繰返す内に、階段状に一段々々悪くなつてとうとう不埒の客となつてし

まつた。自分も失望や衰れやらでガッカリしてしまい
親教会へも氣に憑りなからつい御無沙汰に日を送つて
おる内に、晴天の霹靂、憚急の心に痛棒を喫した。

或日、某先生なら親先生の仰せとして、伝えられた
のは「苟くも氏子の生命の御取次ぎを願出でて置きな
ら、こちら（親先生）は一生涯命になつてお願いして
おるのに」三ヶ月もの永い間、決いとも悪いとも腹ん
だものか潰れたとも言うて未ぬとは何事ぞ、実意が無
いのも甚だしい、お道では実意が無いとは生命（信仰
的）なないのも同じ事。一体生きてゐるのか？、死んだ
のか？とと峻烈極まる御叱責であつた。——云われて
見ればその通りで一切も出ない。願主が手紙で御届け
した筈ですか？、と言つたとて自分の不実意の弁解に
はならない。（手紙は出さなかつたのだらうと氣付い
た）から早速翌日大津へ飛んで行つて、表心から陳謝
した（信者の事をアアスケにはよう云わす）只管己れ
の不実意、不行届きをお詫びし、今後の改まりをお誓
い申上げて、お許しを頂いた次第であつた。思えば、

本當に眞実籠めて御取次ぎ御祈念下されていたからこ
そのお怒りである。難儀な氏子取次ぎ助けたしの御一
念又、子教会を引立ててという御温情、その深いお情
けとお骨折を想えば、親の心子知らずで、本當に相済
まなんだ、と自らを責めた。そこまで眞実籠めて下さ
る親先生と肝に銘じ、叱られながらも、信賴感が強ま
りほの／＼とした温かさにとる思ひであつた。「叱き
は云うべき時では云いもするな、跡には何にもないの
やで……」と仰しやつて大風一過後、跡に一片の雲無
さ如く、光風霽月のお心持ちなら、ニコ／＼と常の御
風貌で以て、色々とお慰めお励ましのお言葉を頂いて
感激しつつ心も明るく帰途に就いた。

噫、この良師既に亡し、悲しい哉、寂寥の情、愈
やす／＼くもない。



松のみかげ（特集号）

昭和三十三年十月廿五日 印刷

昭和三十三年十月二日 発行

非売品

編集兼

発行人

大津市上北国町五十一番地

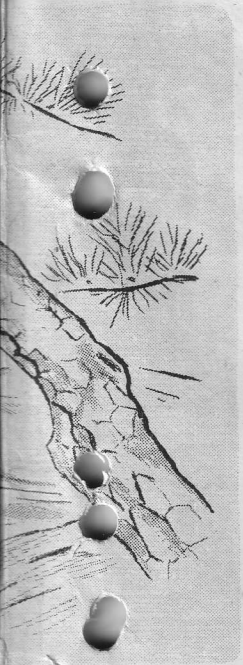
金光教大津教会

松蔭会幹事

津市西校校町

印刷所

黒川 謄 写 堂



[Faint, illegible handwritten text or scribbles]